

# クリティカル領域における患者の羞恥心への配慮に対する実態調査

—患者中心の看護を目指して

キーワード クリティカル領域、羞恥心への配慮、因子分析

C棟3階 ○石阪奈緒 甲斐剛志 金山将裕  
中川規子 水本珠美 大川美加 福山麻里

## I. はじめに

集中治療部(以下、ICUとする)に入室する患者は、生命の危機的状況にあり、治療が優先される状況にある。当ICUでも日々患者と関わる中で、処置・ケアの際、生命を守ることを最優先としている。その際、入室患者は身体露出を伴う処置・ケアやセルフケアを他者に委ねなければならず、羞恥心を感じる人が多い。

近森<sup>1)</sup>は「診療の必要上、患者に羞恥心を捨てさせなければならないこともよくある。しかし、一方人間として、羞恥心は非常に大切でありそれを捨てるということがどんなに悲しいものかという共感も必要である。」と述べている。

2008年に、ICUにおける患者の羞恥心に対する看護師の配慮を明確にすることを目的に調査・分析を行った。その結果、当ICUにおける看護師の羞恥心に対する配慮が明確になった。今回、当ICUを含むクリティカル領域の看護師が患者の羞恥心に対して、どのような配慮ができていないか明確にする目的で追加調査を行った。

当院高度救命救急センターICU、C棟3階ICU(以下、当院ICUとする)看護師にアンケートを依頼した。対象人数が増えたことにより因子項目の焦点が絞れ、内容を明確化できたため報告する。

## II. 用語の定義

羞恥心：恥ずかしく思う気持ち、恥じらいの感情

## III. 倫理的配慮

研究参加者には、協力は自由意志であること、結果は個人が特定されず、研究目的以外に使用しないこと、研究終了後責任をもって破棄することを説明した。回答をもって協力への同意とした。以上のことは当院看護部・看護研究倫理委員会で、承認を得た。

## IV. 研究方法

### 1. 調査期間

2009年10月2日～10月31日

### 2. 調査対象

当院ICUで勤務している看護師85名。

### 3. 方法

#### 1) アンケート調査

2008年に当ICU看護師が考える患者の羞恥心に対する配慮を抽出した36項目から、信頼性、妥当性を高めるために、研究者4名と指導者1名、師長、主任で内容の検討を行い、25項目のアンケートを作成した。アンケートは5検法で調査した。

#### 2) 分析方法

データ分析にはMicrosoft Office Excel 2003を使用し、バリマックス回転分析を行い、主因子法により因子を抽出した。

## V. 結果

1. アンケート調査は当院 ICU 看護師 85 名に行い、有効回答は 78 名であった。性別は男性 18 名、女性 60 名。年齢は、20 代 51 名、30 代 23 名、40 代 3 名、年齢不詳 1 名であった。ICU 看護師経験年数は 1~9 年、ICU 看護師経験平均年数は 3.2 年、看護師経験平均年数は 5.6 年、平均年齢は 27.9 歳であった (表 1)。

表 1 回答者背景

ICU 看護師経験年数(年)	1~9 n=78
ICU 看護師経験平均年数(年)	3.2
看護師経験平均年数(年)	5.6
平均年齢(歳)	27.9

2. ICU 看護師が考える患者の羞恥心への配慮について 8 因子が抽出された (表 2)。

第 1 因子の固有値は 2.951、累積寄与率 11.8%、因子負荷率 0.606~0.886 の幅で 4 項目属し、「陰部・鼠径部観察時の他者からの視覚への配慮」と命名した。第 2 因子の固有値は 2.481、累積寄与率 21.7%、因子負荷率 0.432~0.669 の幅で 5 項目属し、「セルフケア介入時の患者の心理への配慮」命名した。第 3 因子の固有値は 2.252、累積寄与率 30.7%、因子負荷率 0.410~0.907 の幅で 4 項目属し、「身体露出を伴う処置・ケア時の患者の心理への配慮」と命名した。第 4 因子の固有値は 1.892、累積寄与率 38.3%、因子負荷率 0.403~0.596 の幅で 3 項目属し、「身体露出時の環境への配慮」と命名した。第 5 因子の固有値は 1.202、累積寄与率 45.5%、因子負荷率 0.410~0.699 の幅で 3 項目属し、「身体露出時の他者からの視線への配慮」と命名した。第 6 因子の固有値は 1.147、累積寄与率 50.1%、因子負荷率 0.831 で 1 項目属し、「面会時の他者からの視覚への配慮」と命名した。第 7 因子の固有値は 0.995、累積寄与率 54.0%、因子

負荷率 0.763 で 1 項目属し、「身体露出時監視カメラでの撮影の配慮」と命名した。第 8 因子の固有値は 0.799、累積寄与率 57.2%、因子負荷率 0.734 で 1 項目属し、「緊急の処置、検査時の他者からの視覚への配慮」と命名した。

表 2 ICU 看護師が患者の羞恥心に対して配慮する行動についての因子分析  
★固有値 1.0 以上・因子負荷率 70% 以上の場合★ (n=78)

No	項目	因子							
		第 1	第 2	第 3	第 4	第 5	第 6	第 7	第 8
17	夜ソライ陽観察時スクリーン	0.886	0.109	0.146	-0.027	0.054	0.072	0.223	0.082
18	昼ソライ陽観察時スクリーン	0.870	0.206	0.055	0.172	0.080	0.003	-0.029	0.034
15	夜オムリ観察時スクリーン	0.793	0.104	0.213	0.104	0.056	-0.178	0.017	-0.013
16	昼オムリ観察時スクリーン	0.606	0.256	-0.012	0.476	0.211	-0.222	-0.108	-0.085
25	衣服の乱れを整える	0.164	0.669	0.094	0.201	0.212	0.041	0.023	0.269
13	身だしなみへの配慮	0.134	0.590	0.332	0.021	0.230	-0.216	-0.044	0.096
12	年齢・性別への配慮	0.140	0.583	0.192	0.139	-0.037	0.109	0.015	-0.196
21	いかに合わせた観察の工夫	0.214	0.564	0.101	0.290	0.075	-0.061	0.296	-0.132
6	排泄後速やかに処理	0.195	0.480	0.157	0.351	0.249	-0.094	-0.148	0.194
2	身体露出時最小限の人数	0.166	0.156	0.907	0.152	-0.053	0.003	-0.018	0.096
11	身体露出時所要時間を短縮	0.115	0.304	0.813	0.199	0.076	-0.037	0.135	-0.106
8	身体露出時、声かけ	0.136	0.133	0.492	0.258	0.410	0.020	-0.026	0.058
10	身体露出範囲を最小限	0.152	0.364	0.438	0.175	0.282	-0.235	0.200	-0.015
1	スタッフの不必要な会話	0.032	0.184	0.276	0.598	0.036	-0.108	0.190	0.089
3	身体露出時、出入りしない	0.034	0.089	0.410	0.573	0.128	0.117	-0.149	-0.007
23	個人情報の工夫	0.188	0.141	0.015	0.403	0.049	0.288	0.127	-0.097
7	排泄時、スクリーン	0.014	0.044	-0.072	0.020	0.899	0.010	-0.181	-0.046
4	身体露出時、スクリーン	0.176	0.081	0.187	0.054	0.548	-0.176	0.075	0.078
9	羞恥心の表出時、視隠し説明	-0.040	0.432	0.074	0.107	0.505	0.115	-0.048	0.081
5	家族面会時スクリーン	-0.134	-0.042	-0.028	-0.021	-0.076	0.831	0.140	-0.018
22	カメラでの撮影の配慮	0.097	0.015	0.044	0.189	-0.188	0.202	0.763	0.015
19	緊急処置・検査時スクリーン	0.033	0.028	0.018	0.041	0.036	-0.025	0.009	0.734
固有値		2.951	2.481	2.252	1.892	1.202	1.147	0.995	0.799
寄与率(%)		11.805	9.926	9.006	7.568	4.589	4.589	3.979	3.197
累積寄与率(%)		11.805	21.731	30.737	38.305	45.514	50.104	54.082	57.279

## VI. 考察

1. 第 1 因子「陰部・鼠径部観察時の他者からの視覚への配慮」

ICU に入室する患者の鼠径部には多数のルートが挿入されているため、看護師は頻回に観察する。看護師は、身体露出の中でも、陰部や鼠径部を露出することは羞恥心を感じる場面と考え、カーテン・スクリーンをすることで他者からみえないように配慮していることがわかった。

東儀<sup>2)</sup>は、「人間が裸体、特に性的器官を覆う生物であることは、人間が知性や精神をもっていることと同様に、理由を問われても答えることができないほど基底的、実存的な

事実である」と述べている。陰部及び鼠径部の露出に伴う羞恥心は、当然生じる感情であることを理解し、ケアを行うことに重要性を見出しているからだと考える。

## 2. 第2因子「セルフケア介入時の患者の心理への配慮」

当院 ICUにおいて、手術直後、緊急入室の患者は治療の優先により身体の活動範囲が制限され、普段の身だしなみを整えることや欲求を表出することが出来ない状況にある。また、ベッド上で排泄を行い、排泄物の処理も看護師の援助を必要とする。看護師は、普段の身だしなみや外観に対する援助、排泄に対する羞恥心に配慮していることがわかった。

山本<sup>3)</sup>は「外観は他者との関係において社会と個人との接点でもある」と外観の重要性について述べている。治療を優先する中でも、その人らしさを失わない援助に看護師が重要性を見出しているからだと考える。

近森<sup>1)</sup>は「排泄が自らの手でまもなくなくなった、と自覚することは大変ショッキングなことである。だからそれを意識の外へ追いやる症状もショックに対する自己防衛なのだろう。排泄の介助を己心する心情の根底には排泄という行為に対して価値観を異常に低く置いた考えが潜んでいるのではなかろうか。」と述べている。

排泄行動の介助を他者に依頼する患者の心情を考え、排泄時の環境調整や速やかな排泄物の処理を行い、羞恥心を感じさせないように配慮した行動であると考ええる。

## 3. 第3因子「身体露出を伴う処置・ケア時の患者の心理への配慮」

身体露出を伴う処置・ケア時は必要最小限の人数・所要時間の短縮・身体露出部位を最小限にするといった介入方法の工夫に配慮していることがわかった。

患者の羞恥心は看護師の配慮で大きく左右す

る。坂口<sup>4)</sup>は、「医師や、看護師に身体を見られたり、触れられたりする事は、診断・治療の際に当然生じる出来事とはいえ、診察や治療の工夫の足りなさで羞恥心を抱かせてしまっているのも事実である」と述べている。

身体露出を伴う処置・ケアの際、患者が羞恥心を感じることはやむを得ない。しかし、介入時の工夫や配慮により、羞恥心を軽減できると考えた看護師の行動であるといえる。

身体露出を伴う処置・ケア時に、羞恥心を軽減するための声かけを行っていることが分かった。坂口<sup>4)</sup>は、患者の羞恥心が軽減される提案の一つに「やさしい言葉がけで患者がなんでも質問しやすい雰囲気にしておく」と述べている。看護師は常に患者が思いを表出できるよう、傾聴の姿勢で関わるのが重要である。身体露出を伴う処置・ケア時のやさしい声かけは、患者の不安や緊張を和らげることに配慮した行動である。

## 4. 第4因子「身体露出時の環境への配慮」

ICUでは、スタッフが絶え間なく病室を出入りしており、処置・ケア時も連絡事項の伝達がされている。その中で、看護師は身体露出を伴う処置・ケア時、不必要な会話や部屋への出入りを避けていることがわかった。堀田<sup>5)</sup>は、「看護者が日常業務に慣れ患者の心理に対する配慮を忘れがちになる一面があるのではないか」と述べている。

ICUの環境は、患者にとっては生命の危機的状況にあり、処置・ケア中に身体露出を伴うことで、羞恥心とともに、不安や緊張をもたらす。その際に、患者の理解できない医療者の会話や部屋への出入りは、それを増強することとなる。不必要な会話や部屋への出入りを避けるといった環境への配慮は、患者の不安、緊張を和らげ、羞恥心も軽減できると考えた看護師の行動であると考ええる。

5. 第5因子「身体露出時の他者からの視線への配慮」

ICUに入室する患者は、重症度が高く、急変の可能性が高い。そのため、病室も開放的な環境となっており、看護師が患者の観察を常に行え、急変に備えた構造になっている。このようにたえず他者からの視線を感じる状況にある。看護師は、視線を遮る環境への配慮を行っていることがわかった。

小池<sup>6)</sup>らは、「医療者側の配慮によってプライバシーが守られ、羞恥心が軽減できる」と述べている。限られた環境の中で看護師が、ドア・スクリーン・カーテンをするといった他者からの視線を遮るといった工夫を行うことは、患者の身体露出に伴う羞恥心を共感した看護師の行動であるといえる。

4) 坂口哲司：羞恥心の研究－医療現場における青年期女性の羞恥体験－，看護技術 '87-11 Vol.33 No.15, p83-84

5) 堀田初江：看護援助時の“性”への配慮，看護技術，39巻(6号)，p76～79，1992

6) 小池富士美：川崎市立川崎病院院内看護研究収録53回，p121-124，1999.

## VII. 結論

1) 患者の羞恥心に対するICU看護師の配慮において8因子が抽出された。

2) 患者の羞恥心に対して特に重要と考えている5因子は「陰部・鼠径部観察時の他者からの視覚への配慮」「セルフケア介入時の患者の心理への配慮」「身体露出を伴う処置・ケア時の患者の心理への配慮」「身体露出時の環境への配慮」「身体露出時の他者からの視線への配慮」であった。

## VIII. 参考・引用文献

1) 近森芙美子：看護援助における“シモ”の世話－看護婦－患者関係から排泄援助を考える－，看護技術 '92-10増 Vol.38, No.14(1423), p15-16

2) 東儀道子：＜恥ずかしい＞の構造～現代社会に探る～，北樹出版，p25，1989

3) 山本ひとみ「患者のみだしなみ」へのケア，Nursing Today 2006-1, Vol.21, No.1, p7